

彫刻界に新風を吹きこんだ

三国慶一

みくにけいいち

一九三二年（昭和七）から一九三三年（昭和八）にかけては、第一次上海事変シヤンハイの勃発ぼつぱつや、陸海軍将校による犬養首相殺害事件、表現の自由をそくばくする出版物検閲制度けんえいの強化など、国内外の動きが陰悪なころだった。

このとき日本の彫刻界に、新風を吹きこむ作品が生まれた。＞黒風くという題の女の等身大の像だった。

背後から吹く風を受けとめるように、両手をあげながら体を、斜めうしろに引いた姿である。女の顔はふくよかで、まるで血が通って生きているようだった。

「ほうっ。」

「これあ、すばらしいっ。」

「いままで日本人が作った美神の中で、∧黒風∨は最高の傑作だ。」

見る者はみな、この木彫りの像の優しさと、気品の高さに心を打たれた。

わが国の彫刻界に、不朽の名をとどめた∧黒風∨。これを制作したのが、弘前出身の三国慶一である。（＞黒風＜は現在、青森市に住む田

沼純一氏が保存している。）

慶一は一八九九年（明治三十二）、弘前市茂森町の鍛冶屋^{かじ}、三国文吉の四男として生まれた。本名は慶吉という。

一九〇六年（明治三十九）、朝陽小学校に入学したが、腕白坊主^{わんぱくぼうず}で子供たちを泣かせたり、屋根に上って奇声をあげたり、石地蔵に小便をかけた——はらはらせる事ばかりした。

だが、慶一は手先が器用で、小学校のときから手芸が得意だった。朝陽小学校を卒業すると、時敏小学校の高等科に進んだが、このころから彫刻家としての素質があらわれる。

慶一の家近くに、早坂寿雲という仏師（仏像を彫る人）がいた。

慶一は学校から帰ると、よく寿雲の仕事場にやって来た。このときばかりは、腕白坊主も人が変わったように、熱心にじっと寿雲の仕事に目をむけた。

夏休みになって間もなく——慶一が風呂敷づつみをかかえてやって来た。

「これを見てくれ。わ（私）作ったんだ。」

と言って中から取り出したのは木彫りの仏像だった。

寿雲はまばたきもせず、作品に見入っていたが、やがて驚嘆しながら顔をあげた。

「これを、お前が作った？」

作品は粗末な荒削りだが、その中にすばらしい才能を感じたからである。

「慶（慶一）。東京さ出て彫刻の勉強をせいや。きつとのびるから……。」

と寿雲はすすめた。寿雲は中野桂樹や工藤敬三など、すぐれた彫刻家を育てた人であり、馬の彫刻で名をなした前田照雲は寿雲の実弟にあたる。

こうした寿雲のすすめで、慶一が門をたたいたのは、横浜にすむ鈴木寿川という牙彫家（象牙に彫刻をする人）だった。高等科を出たばかりの十四歳の時だった。

「よおうし。石に嚙^{かじ}りについても、ひとかど（一人まえ）の彫刻家になって見せるぞっ。」

そのとき慶一は固く心に決めた。このときはすでに母は亡く、十二人兄妹の末っ子だった慶一は、ふたたび弘前には帰らない——悲壮な気持ちで家を出たに違いない。

このころから慶一は、しだいに口数のすくない、物しずかな反面、内にはげしい闘志を秘めた人間に変わって行った。

牙彫家のもとにいたのは短い間で、そのあと慶一は木彫家、前田照雲へ弟子入りをした。

こまかな手先だけに閉じこもった牙彫より、もつと自由で、雄大な夢を托せる木彫こそ、自分の進む道だと考えたからである。

照雲は変わった人だった。

そのころの師弟関係は、旧くさい封建的なものだったが、照雲はきわめて開放的だった。彫刻の指導は厳しいが、仕事をはなれた生活では、和気あいあいとして自由だった。

こんな人柄の師についた事は、慶一にとっても幸せなことだった。

このときに慶一は散文や短歌・俳句など文芸にも興味を示すようになった。

◎夢覚める如く淋しく夜も深み街角々のガス燈青く

◎音絶えてねむる宇宙を見わたせば月と我のみ住む夜の如く

◎病む床に鏡見つめて淋しくも亡き母の顔想い起こしつ

慶一にはこのような作品があるが、東京に出て厳しい彫刻の道にはげみながら、ふつと自分にかえったときの、わびしい心境がよくあらわ

れている。

彫刻家を志して郷里を出た慶一にとって、一生忘れ得ないのは一九一六年（大正五）、△明けがたの海▽という題の作品が、文展（のちの帝展・日展）に入選したことである。

慶一はまだ十七歳の若さだった。

当時の文展といえば、わが国を代表する権威のある美術展である。

△明けがたの海▽は、ムギわら帽をかぶった年老いた漁師が、海辺に立って、じっと海をながめている作品だった。長いあいだ、厳しい自然に耐えてきた、木訥な漁師の風貌がにじみ出ている。

彫刻を本格的に学ぶために、慶一は東京美術学校（いまの東京芸大）彫刻科に入学した。このときの担任教授は、物の形をそのままに表現する写真派で、日本一の腕をもつといわれた朝倉文夫だった。

慶一はその後△夜の巷▽や△路傍▽△母子▽などの作品を次つぎに手がけ、一九二八年（昭和三）までに帝展七回の入選を果たした。

ちやうどこのころ青森市出身の棟方志功が、洋画の部で帝展の初入選をしている。

そして一九二九年（昭和四）に、慶一の大作△訶梨帝母▽が帝展の特選に輝いた。三十歳のときである。

△訶梨帝母▽は、安産や育児の願いをかなえてくれるという、鬼子母神のことである。

等身大の女の木彫りのこの仏像は、裸の赤ん坊を右手でだきかかえた端麗な姿で、慈悲心にあふれたものである。

△訶梨帝母▽は、若くして母を亡くした慶一の悲しみと、母を失った子供の哀れさをあらわしたものだ。それだけに慶一は、この作品の制作には己のすべてを傾けたし、出来あがった作品にも自信があった。

鑑査結果の発表を、家でまつのがもどかしく、この日、慶一は王子町の自宅から、上野公園の展覧会場まで、はげしい雨の中を歩いて行った。（電車はあったが、まち時間が長かったので乗らなかった。）

会場に着いてさっそく結果を見たが、はたして慶一の作品は特選になっていた。

帝展の特選は、はじめてだった。さすがに嬉しく、慶一はまた雨の中を、ずぶぬれになって帰ってきた。家でまっている妻に、快挙をつたえるためだった。

「か、かっちゃつ。△訶梨帝母▽は特選だぞうつ。」

家に着くなり慶一はさげんだ。自分の作品については、めったに口をいわない慶一だが、このときばかりは、子供のような手ばなしの喜びようだった。

一九三一年（昭和六）に出品した△久遠^{くおん}▽も、再度の特選を受け、慶一の彫刻はまさに絶頂期にあった。

つづいて制作したのが、はじめにも述べた△黒風▽である。△黒風▽は第十四回の帝展に出品したものだが、あまりの素晴らしい出来ばえに推薦という、最高の栄誉を与えられた。

一九三四年（昭和九）には、帝展に△緑樹▽を無鑑査出品。一九三五年（昭和十）には、青森市の日本赤十字社支部で、三国慶一木彫個展を開催し二十二点の作品を出した。

このとき慶一は、久しぶりに生まれ故郷の弘前に帰った。

慶一が手がけるのは仏像や裸婦、童子、少女などが主なものだが、動物の彫刻もよくした。

例えば馬を彫った△妙錦号▽や、日本木彫会大阪展に出した、母猿が子猿を抱いたほほえましい作品△さる▽、第二回向彫会展に出品した、たくましい感じの△牛▽、二匹のウサギが飛びはねるのを現わした△草原▽などかず多くある。どれもリアルで、生き生きとした作品ばかりである。

二度の帝展特選をうけ、最高の推薦に輝いた慶一の手がける作品は、やがて政府買上げへ——と彫刻家として順調な歩みをつづけるが、生活は決して楽ではなかった。

この事について慶一の三男恭三は、子供時代のことを次のように述べている。

「家に金がなくなると、おふくろは筆筒たんすの中から何か取りだして、そっと外に持って行く。つまり、質屋通いをするのがよくありましたよ。でも子供たちのまえでは、家計の苦しさなどは決して話しませんでした。」

慶一自身も北海道にいる、いとこと会ったとき、彫刻家として生活をするのは、どんなに苦しいものであるかを語り「決して子供を、彫刻家にはしないように。」と言っている。

事実、慶一（一家）のそれまでたどって来た生活は、貧しくいばらに満ちたものだったが、あえて彫刻家をやめなかったのは、彼自身がこの道を選んだからだし、家の生活を支えたのは、ぐちひとついわずに耐えて来た、妻の苦しいやりくりがあったからである。

制作に意欲をもやす慶一は、次つぎに作品を手がけて行った。

すなわち一九三六年（昭和十一）第五回日本木彫会展に△かるた▽を、一九三七年（昭和十二）には、第六回日本木彫会展に△清舒▽を
依嘱出品。一九三八年（昭和十三）には、△清唱▽を第二回文展に依嘱出品いしよく。おなじ年に、第七回日本木彫会展に△早春▽を出品した。

そして一九三九年（昭和十四）の、第三回文展に出品を依嘱された慶一は、△藤田中佐の像▽を制作した。

藤田（名前は悠蔵）中佐は弘前市の出身で、当時「世紀の翼」として航研機（註）を操縦し、長距離飛行の世界記録を樹立した人である。

このころは、満州事変に端を発した戦争は長期化し、中国にまで戦線がひろまっていた。世紀の翼の藤田中佐も、ついに中国の上空で戦死をとげた。

当時、文展彫刻界の中堅作家だった三国慶一は、おなじ弘前から出た偉大な鳥人の死を悼いたんで、故人の胸像の制作を思いついたのである。

彫刻一筋に励んで来た慶一は、一九四一年（昭和十六）の第四回文展で、審査員に任命された。審査員に任命されるのは、彫刻家を志す者にとって、その将来を揺ゆるぎないものにする重要な意味をもっていた。

このとき慶一が出品したのは、△地軸▽と題する等身大の木彫りだった。

△地軸▽も△黒風▽のように、上半身裸の女性を扱ったものだが、両手を高くあげた背後に、はげしく焰ほのおが立ちのぼっている作品だった。△地軸▽は躍動感にあふれて周囲を圧した。

この作品の力強さは、そのまま彫刻家三国慶一の制作への、ひたむきな情熱を示している。

時代はやがて、暗い太平洋戦争へと突入するが、慶一の制作は休むことなくつづけられて行った。

そして終戦となり、一九四八年（昭和二十三）には青森市に建立する、平和観音像の原型三体を制作した。

これは一九四五年（昭和二十）七月二十八日の夜、青森は空襲を受け、亡くなった七百人余りの人たちの冥福めいふくを祈るために、青森県知事金井元彦が、平和観音像の建立を県民によびかけ、郷土出身の彫刻家三国慶一に制作（原型）を依頼したものだ。

慶一はもちろん、申し出をこころよく引き受けた。

さっそく彼は、平和観音像の原型作りにとりかかった。

「仏像を手がけるのだから、少しの私心もあってはいけない。」

慶一は厳しく心にいい聞かせた。もし不純な気持があれば、そのまま作品にあらわれるからである。

慶一はこのため仏像の原型を、いろいろスケッチしながら広くモデルもさがした。

モデルは明朗で健康・清純な女性でなければいけない。郷土に建てる仏像だから未婚で、ふくよかな津軽美人の娘さんが望ましい。

こうした条件のモデルに選ばれたのは、弘前市茂森町に住む二十二歳のA嬢だった。

慶一は制作にとりかかってから、途中でなんども原型をつくり直した。自分で納得のいくものをつくるためだった。

完成するまでに、慶一は二年を要した。

こうして心血をそそぎ、原型をもとにつくられた観音像の開眼式かいげんしきが行われたのは、空襲からちょうど三年たった、一九四八年（昭和二十三）

七月二十八日だった。

青森市柳町通りに建立された、平和観音像は青銅製で身長は七尺五寸（やく二二五センチメートル）、台座の高さも七尺五寸。なごやかで慈悲深い顔を、道行く人たちにむけている。

慶一が手がけた作品は優美で、どれも木肌に残る彫刻刀の跡に、にじみ出る品格があり、それが見る人の目を奪わずにはおかない。

これはこまやかな職人芸を持った、牙彫家鈴木寿川と、東京美術学校時代に薰陶くんとうをうけた、朝倉文夫の写実主義（具象）が影響していると
いわれる。

彫刻家三国慶一は短歌や俳句は作ったが、めったに長い文章は書かない人だった。

が、太平洋戦争時代、弘前に疎開したころの思い出を書いた、次のような珍しいエッセイが残っている。

「（前略）差しあたり落ちつく先きもないまま、一家は弘前に疎開したが、皮肉なことにその二ヶ月後には終戦になるという始末で、文字通りてんやわんやだったが、（略）二年ほど郷里にとどまることにした。当時は住宅難だったが、（略）葛原市長さんの斡旋あっせんでただ一つの空き家だった、市の水源地の建物の一つを暫時ざんじの住宅とした。が「酒屋へ三里、豆腐屋に二里」式の別世界で……（後略）」とあり、終戦前後の不

自由な住宅事情をしるばせる。

かず多くのすぐれた作品を手がけた三国は、一九六一年（昭和三十六）に、郷土青森県の知事褒賞を受けた。ついで一九七四年（昭和四十
九）には日芸彫刻功労賞を受賞。一九七五年（昭和五十）には第二回日象展に出品したへうつしみVが、日本文化賞を受賞。一九七六年（昭
和五十一）には、第三回日象展に出したへたなびくVとへ開くVの二点が、特別記念賞に輝いた。

このとき、彫刻界に残したすぐれた業績によって、三国は日展評議員から参与に推された。日展参与といえは彫刻界でも、かず少ない最長
老である。（ちなみに昭和五十六年度の、彫塑部参与は八名だった。）

一九七八年（昭和五十三）に、求青書店から、三国慶一作品集（写真アルバム）が発行された。作品集の扉に、つぎのような歌が載ってい
る。

◎みちのくの津軽のこころゆるぎなく君が木彫の中に流るる

◎日本の木の造形に斯くまでにいぶきこめたる三国慶一

これは歌人で、紙塑人形師である鹿児島寿蔵が、津軽のこころをノミに托し形造った木に生命をあたえる、彫刻家三国慶一のすばらしさを

たたえたものである。

この作品集には、作者の近影と「あいさつ」、年譜は出ているが、作品についての解説などはまったくないのが特色である。

これは、解説をつけるのを忘れたのではもちろんない。作品を見る人に自由に、見方や感じ方をまかせるため、いかにも三国の人柄をあらわしている。

彼は自分で手がけた作品を、後になって口に出すという事は殆どしない人であり、それは作品集の「あいさつ」の中でも述べている。すなわち「生来、私はがむしやらで、後をふりかえる事を好まない性質であります。」とあるように、いかに時間をかけて完成させた作品でも、

いったん手もとを離れると、もう作者とは別な生命（運命）をもって、独り歩きをはじめるといふ考え方だったのであろう。

それは手塩にかけて育てた娘でも、いったん嫁に行けば、親とは別な生き方をするのと似ている。

しかし心の中にあるのは、いかに別な生き方をしても、娘の幸福を祈る親の気持ちとおなじように、慶一も自分で手がけた作品が手元を離れても、じつと優しく見守る——そんな気持ちだったに違いない。

十四歳で上京し、彫刻に自分の進む道を求めた三国慶一は、かずかずの名作を残したが、一九八〇年（昭和五十五）一月十六日、膀胱がんのため東京の荻窪病院で亡くなった。

八十歳だった。

三国家の菩提寺ぼだいじは、弘前市新寺町の法立寺である。しかし住居が東京にあつて、東京で亡くなった慶一の遺骨は、妻の墓がある埼玉県飯能はんのう市の円照寺に埋葬された。

三国慶一が手がけた作品で、弘前に残っている主なものは市立博物館にある、第九回日展に出品した等身大の△裸像▽をはじめ、中作の△街の案山子かかし▽、等身大の△心象▽や△そこはか▽など六十余点をはじめ、母校である朝陽小学校には二人の女を彫った△群像▽、市民会館には等身大の△和▽などがある。

(註) 航研機は一九三七年(昭和十二)、東京大学航空研究所が設計した長距離飛行記録用機。木更津―大田―平塚の三地点を結ぶ周回飛行で一万一六五一・〇一キロメートルの公認世界記録をたてた。

参考文献 木村久逸典『木の造形』一九八三年(昭和五十八) 新潮社

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年(平成十五年) 弘前市教育委員会、三〇〇・三一二頁